

# 花王教員フェローシップ

## 「ヘブリディーズ諸島のクジラとイルカ」

2011年7月25日～8月5日（12日間）

報告者 福澤 富美代（久山中学校教諭）

### 1. はじめに

3月まで海に囲まれた島の学校に勤めていたが、4月に異動になったところは、周囲を山とゴルフ場に囲まれた内陸の学校だった。小規模な学校のため教員一人当たりの仕事量が多く、仕事に追われていた5月の半ばの土曜日、突然 Earthwatch Japan からの「合格通知書」を受け取った。

「？」・・・、「！」。

忙しさのあまり忘れていたが、転勤前の3月、学校に届いた教員フェローシップのプロジェクトに感動し、応募していたのだ。

早速、校長に相談したところ、「先生のこの経験は、子どもたちの教育にも大きな意味がある」と参加を了解していただだけ、私は、参加の準備にすぐに取りかかることができた。

### 2. Silurian に乗り込む前

Expedition Briefing を受け取って、不安に思ったことが2つあった。1つめは、Rendezvous の場所であるマル島トバモリーの Taigh Solais にたどり着けるか？ということだった。コンピュータで情報を検索していくうちに、Scotrail やフェリー、バスでアクセスできることがわかり、Taigh Solais がどんな建物なのかは不明だったが、すぐにこの不安はほぼ解消した。しかし、2つ目の不安は、参加当日まで（正確には、プログラムの最終日まで）付きまとうことになった。それは、Briefing に書いてあった次の一文だ。「No specific skills are required for this project, however, you must be proficient in the English language・・・」。Proficient？「日常会話程度の『旅行』英語」ならできる自信はあるが、proficient とは程遠い。衰えた会話力にかなり不安を覚えた。あわててBBCニュースのCDを買い、毎日1時間は聞くようにしたが、仕事の忙しさに追われ思うように進まず、不安を抱えたまま出発を迎えた。

日本から London、London から Glasgow を経由して Oban、そして Tobermory までは何の問題もなく到着できた。

Tobermory はカラフルな建物が並び、小さいが美しい町だ。海産物も豊富でカニやロブスター、帆立貝、新鮮で安く、おいしいものもたくさんある。また、16世紀にイギリスに敗れたスペインの無敵艦隊の船が逃れた来た後、沈没した場所など史跡やトレッキングのコースもある。英語力への不安を抱えながら、7月25日の午後6時、埠頭の駐車場の奥にある海洋センター（Taigh Solais）のロビーで The Hebridean



Whale and Dolphin Trust（HWD T）のスタッフに出会った。

▲トバモリーの町



### 3. Silurian での日々（7月25日～8月5日）

#### ◆Silurian号

全長18mあまりの2本マストのヨットで、ボランティア用には2つのベッドがあるキャビンが3室、スタッフ用のキャビン（4つのベッド）とダイニング、キッチンと2つのトイレ、シャワーがある。元は、Lonely Planet社の取材用のヨットとして使われていたものHWD Tが買い取って、調査用に使用しているということだ。狭いながらも快適な空間で、考えられた収納スペースに驚くほどたくさんのものが収納されていた。

今回のボランティアは、オランダ人のローランドとグリア、アメリカ人のエリン、イギリス人のハリー、板垣さんと私の6人



▲コンパクトで機能的なキッチン

だ。スキッパーは、経験豊富な元コーストガードのグレン、ファーストメイトは、料理上手な力持ちのエマ、研究者は、明るく元気なオリビアの3人だ。この9人をのせて、12日間の旅が始まった。

HWD Tは、1994年から活動しているNGOである。ヘブリディーズ諸島周辺の海域は、世界的に見ても鯨や海洋生物の豊かな生息地であったにもかかわらず、はほとんど注目されず、調査も行われてこなかった。そこで、HWD Tが、この海域で、主にミンク鯨、ネズミイルカ、バンドウイルカ、マイルカ、ウバ鯨、シャチ、マンボウ、アザラシなどの生息域や数や、それが船の騒音、カゴ漁の仕掛けや温暖化の影響等でどのように変化するかを継続的に調査することで、どのような保護を行うべきかを提言し続けている。

調査としては、目視と海中の音響調査によって、イルカや鯨等の生物の数を調べ、写真にも撮り確認する。また、鯨類の生息に影響を及ぼす船の騒音やカゴ漁の仕掛けの位置や数、海に浮かぶゴミの調査も同時に行う。また、海鳥の数と種類、航行する船の数と種類もチェックしていく。この作業を、目視1時間、休憩1時間、伝達係30分、コンピュータ入力30分の3時間を一つのサイクルとして、6人のボランティアで交代で仕事をする。毎日はおおよそ午前10時～午後5時くらいまでの仕事となっている。

晴天で暖かい日は快適だが、雨が降ったり、波が高いと過酷な仕事になる。



▲デッキでは2人で左右を目視



◆7月26日

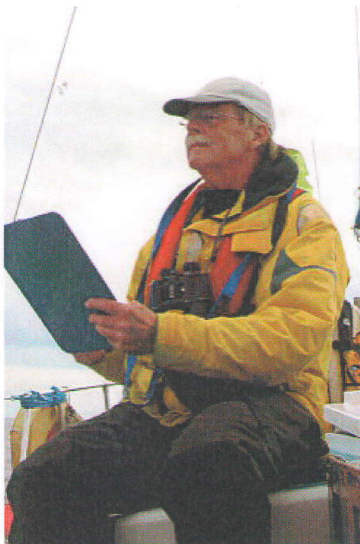
マル島のトバモリー港から午前10時にシルリアン号は、ゆっくりと出航した。「イルカ？」最初にマストに立つことになった私は、出航して30分もたたないうちに最初の発見をした。あわてて、「I found something!!」と叫ぶ、私の声にオリビアが出てきた。「Dolphin?」と問う私に、「It's a minkie!」。距離もあったのでずいぶん小さかったが、これが最初のミンク鯨との出会いになった。この日は、もう一度、遠方でミンク鯨を発見し、その後は、何も見つからず、カゴ漁のしかけ(creeel)の調査数が増えていくばかりだった。そして、夕方になり、最初の停泊地Canna島に到着する。Cannaはかつてはベネディクト派の修道院があり、人口も多かったが、現在は、人口30人余りの島だ。湾には、たくさんの海鳥と灰色アザラシが顔を見せた。



▲夕暮れのCanna島

◆7月27日

好天すぎた昨日、直射日光を浴びたためか、朝起きたら日焼けで顔がひどくむくんで驚いた。北極圏に近いため、思ったより太陽光線は強烈なようだ。今日からは、入念に日焼け止めを塗ることにした。10時に出航して、しばらくは順調に進んだのだが、途中から雨が降り始めた。マストに立つと、風も強く、横殴りの雨が降り注ぐ。体感温度は5度くらいで、布の靴では風が防げず、足が冷たくなった。波も2mを越えてきて、だんだん揺れも激しくなってきた。今日は、ミンク鯨を遠方で見かけ、マイルカを2頭見つけたらしいが、風雨が強くなってきてので、Barra島に午後4時に碇を降ろし停泊する。スキッパーのグレンが、Barra島の漁師さんからホタテを買ってきてくれて、夕食に料理してくれた。大きくて新鮮なホタテは、今まで食べたことがないくらいにおいしかった。



▲海鳥の数を数えるローランド

▼バンドウイルカの群れに会う

◆7月28日

9時ごろにBarra島を出航し、2時間程度航海した時、今日最初のイルカを発見する。バンドウイルカが1頭、黄色い信号ブイのまわりを泳ぎ回っていた。さらにその後、海上をBow-rideするバンドウイルカを3頭発見。今日は、夕食当番だったので、午後3時から料理の下準備で仕事は免除。エマに手伝ってもら





いながらラザニアをつくった。シルリアンの冷蔵庫や食料庫には、思ったよりなんでもあって、オープンでラザニアを焼き、山羊のチーズとトマトやベビーリーフ、レタス、キュウリ、パプリカなどの野菜でサラダを作った。1人1回は夕食をつくらねばならないというノルマをこなすことが出来、ほっとした。今日は、南Uist島の北端に近いTahay島に停泊する（北緯57度40分、西経7度6分）。水を節約するために我慢していたシャワーを3日ぶりに浴びることができ、本当に気持ちよかった。

#### ◆7月29日

▼海鳥の巨大な繁殖地になっている

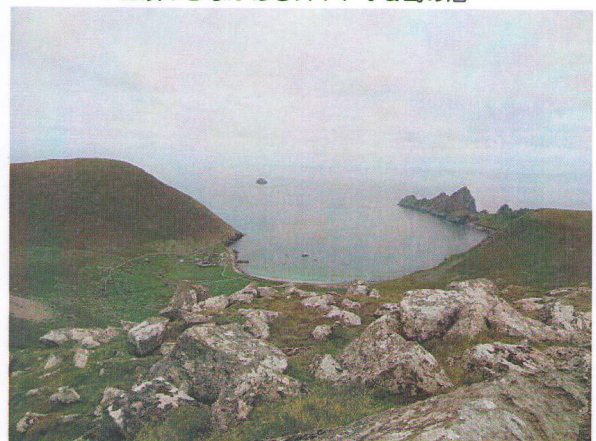
昨夜のミーティングで、天候が安定しているので、大西洋に浮かぶ孤島、St. Kilda（北緯57度48分、西経8度31分）に行くことに決まった。いつもと違い、朝早く5時頃にグレンたちは起きだし、シルリアンはKildaに向かい出航した。北西から吹く季節風に向かうように、船は北西に進むため、次第に揺れが大きくなった。私は少し酔ったような気がして、エリンと一緒にキャビンで寝かせてもらった。3時間くらい眠ったら、船の揺れは収まってきて、デッキに出るとSt. Kildaが見えてきた。St. Kildaはユネスコの世界遺産に指定されている4つの島だ。



garnetやfulmar、puffinの世界的なバードコロニーにもなっている。この絶海孤島には、かつては居住者がいたが、現在はナショナルトラストの職員とイギリス軍の兵士が滞在するにもである。普段はこの島の周辺の海域は波が高く、ヨットでは容易には近づけないとグリアが言っていた。島には、たくさんの山羊と鳥たちが住むが、人が住むことは、容易には容認しない。氷河でけずられた深い谷や切り立った崖。1930

年、半ば強制的に本土に移住させられた30人余りの住人は、それでもこの過酷な島との別れを惜しんだという。羊と薄い土壌でつくるわずかな穀物と魚と海鳥の肉と卵、それが食料のすべてであり、原始に近いと評された生活で生きていたとしてもだ。島を歩き、彼らが残した生活の跡を見ながら、「生きる」ことについても考えさせられた。

▼山頂からながめるHirta島の港



#### ◆7月30日

St. Kildaの海域は、今日も穏やかだ。9時にシルリアンは出航し、鳥の楽園に別れを告げるこ

とになった。ルイス島に向かって航海する途中、white-beaked dolphinの群れやネ



ズミイルカを見かける数が増えてきた。午後8時まで航海を続け、Great Bernera島の無人の湾に停泊することになった。スコットランドの島々は、木の生えていない断崖で囲まれた島が多い。このBernera島もかつては移住者がいたが、自然環境の過酷さから、ここでの暮らしをあきらめ、数年でオーストラリアに移住したそうだ。波の音以外何の音もない世界は、真空のような静寂の世界で、視界の中で動くものは、遠くでぽつんと草をはむ山羊だけだ。

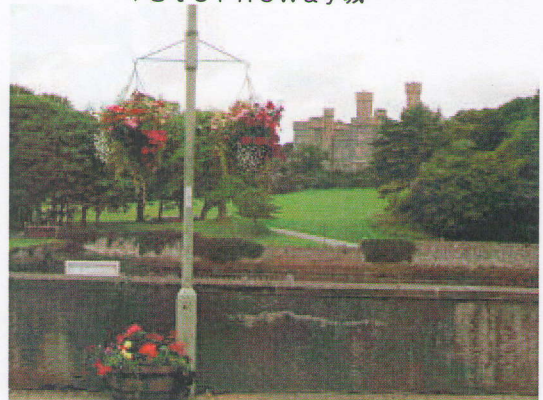
#### ◆7月31日

今日はルイス島の北の端をまわり、ルイス島最大の町、Stornowayをめざして航海することになった。沖に出るとにわかに船が揺れだした。東からの風が強く吹き付け、白波が絶え間なく立ち、波も2mを越えるように高い。ルイス島の北端は海の難所だとスキッパーのグレンやエマが言った。東風をまともに受け、波が高いため、こちらをまわって航行するヨットは少ないという。高波と風でシルリアン号は木の葉のように揺れる。風雨が強まる中で調査を続けていたが、ローランドが脱落し、結局、Stornowayに入港する前の、午後5時には調査は打ち切りになった。午後8時前にStornowayの港に入った（北緯58度10分、西経6度24分）。港に入ると、灰色アザラシがシルリアン号を追って、ついて泳ぐ。久しぶりの町なので、夕食後はみんなで上陸し、バーでビールを飲んだ。

▼Stornoway城

#### ◆8月1日

昨日の嵐で疲れたスタッフの休養のため、今日は9時に起床。出航も11時ということで、ボランティアの4人は連れだってStornowayの町の散策に出かけることになった。ルイス島全体で人口が2万人程度らしいので、Stornowayの人口は1万人程度だろうか、みやげ物屋やたくさんの店があり、買い物客で通りは賑わっていた。



11時20分に出航し、12時より調査開始となった。快晴で穏やかな波のMinch海峡を南下していくと、次々とネズミイルカが見つかる。英語ではPorpoiseというネズミイルカは、バンドウイルカなどとちがい、Bow-rideすることもなく、また、人なつっこくもない。姿を見せても、すぐに潜って見えなくなってしまう。しかし、今日は、次々と姿を現し、20数頭目視で見つけることが出来た。今日はHarris島の小さな港に停泊することになった（北緯57度52度、西経6度42分）。碇が調子が悪く、停泊するのにかなりの時間を要した。

#### ◆8月2日

美しく晴れた朝。しかし、昨日から碇の調子が悪かったので、碇を巻き上げるのに30分以上かかってしまった。North MinchからLittle Minchへ航海をしていくと、ミンク鯨やネズミイルカ、バンドウイルカなどが次々と目視で発見される。Skye島の切り立った崖を見ながら



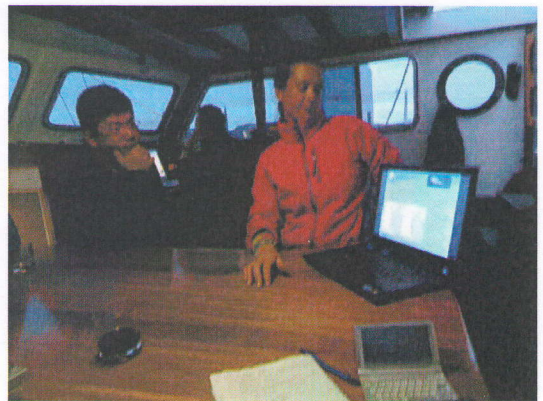
進んでいくと、天気が少しずつ悪くなり、小雨が降り出した。



そんな中で、ミンク鯨を発見し、シルリアン号でそっと近づくと、ミンク鯨も近づいてきて、シルリアンのまわりを行ったり来たり泳ぎ回る。時折、顔を出して私たちを眺めているようなそぶりを見せた。こんな事は、滅多にないらしく、スタッフのオリビアもエマも大興奮だった。小雨で視界は悪いが、収穫の多い一日になった。午後6時過ぎにSkye島の西側の港、Port Nanlongに停泊する

ことになった（北緯57度20分、西経6度24分）。この港の周りには、画家などたくさんの芸術家が住んでいるそうだ。ボランティアのみんなで上陸して散策し、バーでCiderやビールを飲んだ。

夜、オリビアからHWD Tの2003年～2010年までの調査についての説明があった。海水温の上昇などの変化のためか、ヘブリディーズ諸島周辺では、ミンク鯨の南下が見られ、プランクトンを食べるウバ鯨が増え、ミンク鯨の数の減少などの変化が起こっているという。



▲オリビアによる調査報告

#### ◆8月3日

穏やかな朝だ。朝食後、グリアとハリーが釣りを始めた。しばらくして、鯖の一種らしい魚が釣れた。Skye島は本土と橋でつながっているためか、他の島と違い、交通量も多く、活気があるように見える。Stornowayと同じように、たくさんの木があり、花も咲き乱れている。今まで寄港した港のほとんどは、切り立った崖、短い草のみが生える大地で、人を拒むかのような自然を目にしてきたが、南下してきたためか、自然が豊かになってきた。

Little Minchを南下していくと、海でもネズミイルカやミンク鯨を多くみかけるようになってきた。好天の中、シルリアンは洋々と進んでいく。今日はRum島に停泊することになった。氷河で削られてできたLoch Scaortには、何隻ものヨットが停泊していた。製粉機の製造で大儲けしたJhon Bulloughが18世紀、この地に城を建て、住んでいたころには400人以上の人口を数えたが、19世紀



▲Rum島（建物はナショナルトラストの事務所）

には、産業も衰退し、極貧になったため、アメリカとカナダに多くの住民が移住し、50人余りしか残



らなかった。その後、牧羊で100人余りの人がSkye島から移住してきたこともあったが、1991年には人口は26人になり、スコットランドナショナルトラストのスタッフと教員のみが住んでいる。

島に上陸すると、高い木が生い茂る森だが、Mindgeという小さなブヨがうようよいる。1ポンド50を払って入るシャワーを浴びて、Mindgeを手で払いのけながら、散策をする。島には、鹿や様々な海鳥、野生のポニーもいるらしいのだが、とにかくMindgeが多すぎて、早々にシルリアンに退散した。

#### ◆8月4日

雨の朝。雨に煙るRum島は幻想的だ。

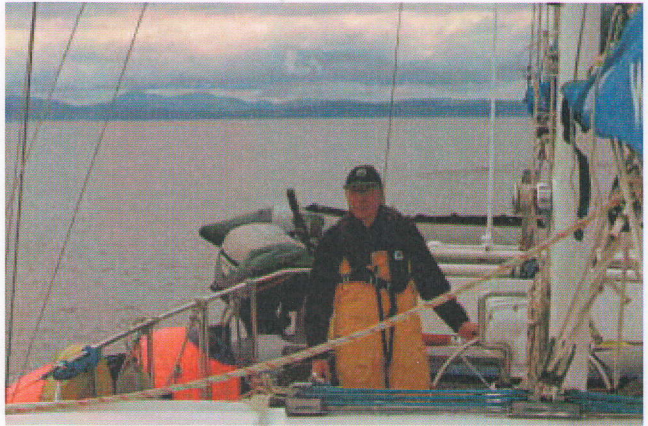
9時に出航すると、次第に晴れてきた。今日は、もうTobermoryに向かう。Mull島に近づくにつれ、ヨットや船の数や海に浮かぶゴミの数が増えてきた。やはり、環境を悪くする最大の要因は、人なのだと思う。

「人」が増えてきたためか、今日は動物たちはほとんど姿を現さない。

灯台をまわって、14時過ぎにはTobermoryの港に帰ってきた。上陸して、1時間ほど町を散策した後、みんなでシルリアンに戻って、大掃除を開始。2週間お世話になったシルリアンの隅から隅まで心をこめて掃除をする。

掃除をした後、みんなで順番にシャワーを浴び、高台にあるWestern Isle Hotelでディナーを食べた。最後の晩餐は、和やかでとても楽しい夜になった。

▼スキッパーのグレン



#### ◆8月5日

いつものように8時に起き、シリアル朝食をとり、荷物をまとめてボートで岸へ。9時40分のバスでみんなでTobermoryを離れた。

#### 4. このプロジェクトで学んだことは？

##### ①何事も、地道な調査によるデータの積み重ねなのだ

調査活動は、人間の力で、広い海を定期的に航海し、目視や音響調査などを積み重ねてデータをとる作業だ。寒さや雨、荒れた海の中の航海、調査には困難が多い。また、交代で行い、途中休憩が入るといっても、1時間連続で揺れるデッキに立って集中力を切らさずに目視を続けることや間違えずに素早くコンピュータの処理をすること、海鳥の種類を見分け、数を記録していくなどの作業は大変なものだ。このような地道な作業をどこかで誰かが行っているからこそ、適切な指摘ができ、かろうじて環境が守られているのだということがわかった。



## ②スコットランド北西部の自然と歴史

気候の違いや人口密度の違いなど様々な要因があるだろうが、スコットランドの自然の美しさが守られた要因のひとつは、土地の貧しさ、自然の過酷さが、「人」を拒んだということもあるのではないかと思う。ヘブリディーズ諸島をまわると、北に行くほど、島に移住してきた人々の生活は過酷さを増すように思えた。泥炭のみを燃料とし、石と泥のみが生活を支え、薄い土の層からわずかにとれる穀物の収穫と魚や海鳥の肉と卵、それのみ

▼切り立った崖が多いヘブリディーズの島々



を食料とし暮らす。しかし、生活はいつも飢えと貧しさとの戦いであった。新大陸からもたらされたジャガイモは、奇跡のような穀物ではあったが、アイルランドを襲った『ジャガイモ飢饉』は、スコットランドの島々をも襲い、人々は島での生活に見切りをつけ、アメリカやオーストラリアへ多くの移住者をだすことになった。社会科教員である私は、通常の「旅行」とは違う今回の旅で、一見華やかに見えるヨーロッパの人々の暮らしの、別の部分を実感できた。

## ③語学はやっぱり大切

大学時代に西洋史学を専攻していたので、英語には自信もあり、実際、英語での会話には、個人的に旅行にでかけても不自由を感じることはなかった。しかし、前任校での4年間、事情があってハングルの勉強ばかりしていたところ、気が付かないうちに英語力はひどく落ちていた。今回、参加にあたってBBCのニュースを毎朝聞きながら通勤していたが、ほとんど聞き取れなくなっていることに愕然とした。結局、ほとんど力を回復できぬままに参加することになった。スタッフの説明などは、ほぼ理解できたが、やはり積極的に会話できたかという点で厳しいものがあった。帰国してから、現在も毎日BBCやCNNのニュースを聞くようにしている。今回の旅の反省から、日々きちんとメンテナンスをしないと、英語力は衰えることを実感したし、やはり、英語ができなければ相手の考えを知り、理解するチャンスを失うとわかったからだ。

## 5. 学校での教育実践にどのように生かすか？

帰国後、8月の職員研修で、まず、勤務する学校の職員に今回の旅の概要と学んだことを1時間余りの時間を使い紹介した。生徒にもだが、教員に伝えて、さらにそこからより多くの子どもたちに学んだ成果を広めることができればと思った。

さらに、これから地理や歴史、さらに公民の授業でも、生物の多様性や環境を守る努力、スコットランドの自然、歴史、人々の暮らし、外国の人たちとの分かり合うために必要なことは何か？など、様々な取り入れ、授業を組み立てていくことは可能だと思う。さらに、保護者向けにも講演をすることも可能だ。2学期がはじまり、あわただしく日常は過ぎていくが、今回得た貴重な経験を様々な生かし、伝えていきたいと思う。



## 6. 終わりに

下の地図は、私たちがシルリアン号に乗って、航海した軌跡である。水色や赤などの様々な印は、バンドウイルカやミンク鯨、ネズミイルカなど様々な鯨類や海洋生物を、デッキに立って目視しながら発見した場所である。船酔いしたり、狭い船内での生活に困惑したこともあったが、日常では考えられない、また、個人的には到底なしえない貴重な体験をすることができた。ヘブリディースの島々の夢のような景色の中で、環境保護の最前線を体感できたことはもちろんだが、狭い船内で9人が密着して暮らしたことで、欧米の人たちの生活、考え方、行動などもより深く理解できたように思う。このことは、今後10数年教員生活を続ける私にとって、生徒たちにより正確な、また、実感に基づいた情報を提供できるという意味でも、貴重な体験だったと思う。

今回、このプロジェクトに参加させていただき、貴重な体験をさせていただくことができ、花王株式会社、アースウォッチやHWD Tのスタッフの方々に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

